

34 【街の散策からの気づき発見】

「日枝神社と地域の安全を守る神仏たち」

会員 K.T.

旧日光街道入り口の一宮交差点に日枝神社がある。社殿の傍に「日枝神社再建記念碑 昭和59年(1984)一宮町会」が建立されている。『この神社は、いつ頃からあるのだろうか?』、『郷土かすかべ電子化資料』・須賀芳郎 著『春日部の神社』1996年によると、「日枝神社【一宮町内】ご祭神は、大山昨命(おおやまさのみこと) 鎮座年月日は不詳なれど、故老の伝承によると、江戸時代初期山王様として、この地に勧進された。(後略)」、とある。

「山王様」について、日枝神社のホームページで由来を調べると、「当社は武蔵野開拓の祖神・江戸の郷の守護神として江戸氏が山王宮を祀り、さらに文明10年(1478)太田道灌公が江戸城内に鎮護の神として川越山王社を勧進し、神威赫赫として江戸の町の繁栄の基礎を築きました。やがて天正18年(1590)徳川家康公が江戸に移封され、江戸城を居城とするに至って「城内鎮守の社」「徳川歴朝の産神」として崇敬されました。二代秀忠の時の江戸城大改造の際、城内紅葉山より新たに社地を江戸城外に定め、社殿を新築して遷祀されました。(中略)慶応4年/明治元年(1868)6月11日以来、日枝神社の称号を用いることとなりましたが、古くから「日吉山王社」・「日吉山王大権現社」・「江戸山王大権現」・「麴町山王」ひろく「山王社」と称され、氏子にとっては「お山」であり、一般には常に「山王さん」の名で親しまれてきました。(後略)」、とある。

明治元年の日枝神社への改称は、八坂神社と同じく神仏分離令の対処だろう。神社の庚申塚に三猿がいた。三猿は「見ざる、言わざる、聞かざる」の教えを体現しているという。日枝神社への神使いは「猿」だ。その傍に「猿田彦太神」の碑、裏に天保12年(1841)と刻まれている。『日枝神社と猿田彦太神は関係があるのだろうか?』、『猿田彦』は『古事記』や『日本書記』の神話に登場する天孫降臨道の案内をした国津神だ。道案内役をしたことから地域の祭礼等で地域を練り歩く際、天狗の面をかぶって先頭を歩くのが「猿田彦」とされている。また、諸説あるも、江戸時代頃から「サル」の音から「庚申信仰」や道案内の神から「道祖神」と結びつけられた。

「山王様」は、江戸時代初期(1603~1680)頃に勧進したとの伝承から、「猿田彦太神」の碑が建立された頃は、既に神社はあったであろう。『何故?この時期に、この碑は建立されたのだろうか?』、天保12年(1841)の世相を調べると、江戸時代の三代改革に挙げられる「天保の改革」が始まった頃だ。江戸時代後期(1750~1867)になる。この改革は、老中水野忠邦の失脚により、3年程で頓挫、失敗した。この時代、天保の大飢饉(1833~1836)があり、冷害・大雨の異常気象により、農作物が不作で、多数の餓死者が出た、という。当時の村人たちは、暮らしが楽になる方向へ行くように願って、建立したのだろうか。社殿裏手にいくと、路地にお地蔵様が三体祀られている。お地蔵様は地蔵菩薩の化身で、民間信仰では、村の外からくる災いを防ぐ道祖神、また、こどもの守り神、として信仰されてきた。町内の人が世話をしているのだろう、三体のお地蔵様には赤い前掛けが綺麗につけられている。前掛けは「赤ちゃん」の象徴、赤色は魔除け、厄除けの意味があるといわれる。医療が未熟だった昔は幼くして亡くなる子どもが多かった。その菩提を弔うため、あるいは子供の健やかな成長を願うため、お地蔵様を建てたのだろう。隣は、浄土真宗 源徳寺の墓地だ。この一画には多様な神仏たちが祀られている。日本人は「無宗教者」が多いといわれるが、そうは思わない。信仰心は低いと思うが、神社、お寺、お地蔵様等、神仏を尊ぶ伝統は地域の暮らしの中に脈々と続いている。

